

菅公の伝承

長良天神神社 禰宜 玉岡充臣

国家に功名を貽した偉人を神として祀る神社は、明治以降においてその社格を、別格官幣社として崇められてきた制度の中で、道真公を祀る太宰府天満宮と北野天満宮は古典の神や皇統を祀る神々に列して、官幣中社として特に篤く崇敬されたのは、この両神社が創立後朝廷の篤い御崇敬を受けた事と、菅公の御事績の数々が非凡に優れておられ、仰げば仰ぐほど御生前から既に神性が感じられ、庶民の畏敬が信仰的に広まった、高い御徳によるものと云えます。

天神様を祀る神社は全国に一万二千社におよびます。菅原道真公が延喜三年、太宰府で遷化（せんげ）され天満天神と仰がれてから、今年は千百二十年を迎えました。本日は道真公とはどのようなお方であったのか、その生い立ちから御徳の一端をお話し致します。

菅原家は第四十九代光仁天皇の御代に、土師部宿祢古人卿が菅原の姓を賜り、古人卿の孫に当たる菅原是善卿が、道真公の御父であります。

菅原家の元祖は、天穗日命にはじまり、その十四世の孫野見宿祢が、第十一代垂仁（すいにん）天皇の御代に、土偶をもつて殉死に替えることを建議した功によって、土師姓を賜ったと云われる由緒ある家柄であります。

母君は藺文字姫と申し、伴真成（とものまなり）の娘と伝えられております。

道真公は第五十四代仁明天皇の承和十二年（八四五）六月二十五日（丑の日）に生まれ、幼

名を梅園丸（御屋敷を紅梅園と呼ばれていた）と名付けられたのであります。

道真公の御生誕について、母君が夢の中で庭園の青梅が風に吹かれて、落ちる弾みに飛びはねて、懐に入ったので驚いて

人ならば浮名や立たん小夜ふけてわが手枕に通う梅が香

と歌詠みして夢から醒められたが、それから懐妊されたと言われ、御生まれになってより二十五日の間、口中に一物を含んで出されないのです、法性房（ほっしょうぼう）僧正（そうじよう）を招じて念誦（ねんじゆ）されたところ、口中より一つの梅実を吐き出された。それを庭に播かれると、一本の白梅が生えたと云われています。

この不思議が広まり、仁明天皇から勅使が差遣されて、御名を「道実」と賜ったのであります。この道実の御名は朝廷から賜った文字で、古今実録・菅公御一代記には、この文字が使用されていますが、菅公の御一代が真実一路であつた御徳を称えて、いつしか「道真」と記されるようになりました。

この白梅は、菅公が殊の外愛賞され、九州

下向（げこう）の時

こち吹かば匂いおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

と詠まれた白梅と伝えられており、またこの白梅が菅公の御心に感じて、太宰府まで飛翔して、慰めまつたと云う飛梅神話が伝わっているのも、菅公御出生と梅の神秘を物語る一つであります。

伊勢外宮に仕える神職の度会春彦と云う人は、幼いときから頭髮が白かったので、白太夫（はくだゆう）とよばれ学問の道に深く通じておりました。この春彦が夢の中で天上の神童

が現れて「われ都に名高い菅家の一子と生まれ出るから、その時は必ず心を合わせるように」と告げて姿が消えました。この夢が一度ならず四度重なるに及んで不思議に思い、上洛（じようらく）の折りに菅家に立ち寄り、是善卿に伝えたところ、是善卿も不思議に思われて「一子が生まれたら必ずお知らせしよう」と約束されました。

それから間もなく蘭文字姫が懷妊され、菅公が御生まれになったので、早速この旨を度会春彦に知らせられ、上洛した春彦が菅公を抱き上げると、菅公は赤子ながら機嫌よくされ、下におろすとむずかれるので、是善卿は愈々不思議に思って、春彦にお守役として菅家に留まるように頼まれたのであります。こうした縁によつて春彦は終生菅公にお仕えすることになったのであります。

菅公が御生まれになった承和十二年六月二十五日が、丑年の丑の日であつたことから、菅公と牛のかかわりが、神秘的な一面として伝えられています。

菅公が元服されたのは、第五十六代清和（せいわ）天皇の貞観（じようがん）元年（八五九）二月の丑の日で御年十五才の時であります。その元服の儀式をすまされた夜、南庭の松の大木が大風に倒れ、下につないでいた白牛が圧死した夢をみられたことを気に病まれ、自ら白牛を画いて、丑の日を忌日として祀られたと伝えられています。

その後第五十九代宇多（うだ）天皇の寛平（かんぴよう）五年九月、北山に茸狩りの宴を催された時、何処からともなく白い仔牛が現れて、菅公になつた素振りをするので、菅公は以前の白牛圧死の夢を思い出され、有縁（うえん）を感じて家に連れ帰つて、牛車を牽かせることになりました。ところがこの白牛は、不思議にも御者（ぎよしや）の指図を待つことなく、菅公の行先を察知して車を牽いたと云われております。

さて此の白牛は、第六十代醍醐天皇の延喜元年（九〇一）一月二十四日の夜、突然菅公の屋敷より姿を消してしまったのであります。翌二十五日の朝菅公がこれ案じて居られる所へ、宮中から勅使が到着して、太宰権師（ださいのごんのそつ）左遷の命が伝えられたのであります。菅公は勅詔（ちよくじょう）なれば致し方なく九州に旅立たれることになりました。

菅公が九州に赴（おもむ）かれる途中、河内（かわち）の道明寺に住む叔母に別れを告げられて、こもやま里に至ります時、菅公の一行は藤原時平の放った刺客に襲われ、あわやの危機に直面されました。その時屋敷から姿を消した白牛が、忽然（こつぜん）と現れ刺客を撃退したのであります。そこで菅公は白牛が姿を消した意味を悟られ、それよりは此の白牛を伴って、九州に赴かれたと伝えられております。

この白牛は、その後菅公が延喜三年（九〇三）二月二十五日、九州で亡くなられた時、その柩を牽き葬場に行く途中、白牛が座り伏せて動かなくなった所が、その場に居合わせた老婆の言葉で、菅公が平常愛でられた所と解り、其処に葬ったのが今の太宰府天満宮の場所であると云われ、牛は菅公の御心をよく察知してお仕えしたと云う神縁によって、今に菅公を祀る神社が臥牛像を安置する縁起となっております。

菅公が5才になられた時のこと、庭の紅梅が美しく咲いているのを眺められ、日頃お側に仕えている侍女が、口紅をつけて化粧しているのを思い浮かべられたか

うるくしや紅の色なる梅の花あこが顔にもつけたくぞある

と和歌を詠まれて、居並ぶ人を驚かされたのであります。

この噂が広まって時の帝仁明（にんみょう）天皇より「汝学問して父祖にも勝り家名を輝

かすように」と勅諭（ちよくじよう）を賜ったのであります。

八才のとき碩（せき）学者の都良香（みやこのよし）に師事（しじ）し、学問を修められたのでありますが、その学識は先天性なものでありました。

十一才の春、父是善卿が菅公を試さんと、今宵の情景を作詩せよと命ぜられると、菅公は即座に筆を執り

月輝如晴雪（げつこうせいせつのごとく）

梅花似照星（ばいかしやうせいににたり）

可憐金競

転（あわれむべしきんきやうてんじて）

庭上玉房馨

（ていじやうにぎよくぼうのかおれるを）

（晴れ渡った空に月が輝いて、梅が星のように無数に咲き匂っているので、可愛そうに、贅を尽くして造られている金殿玉楼が色を失っている）

と作詩されました。これは菅公が初めて作られた詩で、並み居る人々が咄然としてしまったと伝えられ、これを聞いた師の都良香卿は、その英才を嘆（たん）じて「我が才到底（とうてい）菅公に教える力が無い」と師範を辞退し、その後は学友の交りをされたと云われています。

菅公が十五才のとき元服して、幼名梅園丸を道実と改められ、母君がこれを祝福して

久方の月の桂を折るばかり家の風をも吹かせてしかな

と歌われたことは、わが子の出世を願う「母ごころ」が滲み出た名歌と称えられております。当時菅公は文章生の試験を受けるために勉強中で、この試験に合格することは、学問で朝廷に仕える菅原家にとっては、必要な第一関門であつたわけであります。

「月の桂」は栄冠の表現で、文章生に合格の意味が込められており、「桂を折る」とは文章生だけでなく、更にそれ以上の学問を修めることをのぞまれたもので、「家の風」には学問を以て朝廷に仕えている家柄を表し、菅原の家名を挙げる願いが込められた、母君の親心と祈りであり、こうした母君の慈愛の中で菅公はすすく成育され、その天性を磨き学徳を積まれたのであります。

菅公は十八才にて文章生に見事合格されました。これは当時では希有（けう）と云われた最年少の記録でありました。その後成績優秀で、文章得業生（とくごうしよう）となり、前後して清和天皇御学問の御相手に選ばれたのであります。次いで三十三才の時文章博士となられて、学問を以て朝廷に仕える家名を確実なものになされたのであります。

陽成（ようぜい）天皇の元慶（がんぎょう）四年（八八〇）に父是善卿が逝去され、菅公三十六才で菅原家を継がれたのであります。特に宇多天皇は藤原氏累代の専横を抑えんと菅公を信任登用（とうよう）せられ、菅公亦真心を以てお仕えされたのであります。菅公の博学多才、忠孝兼備（ちゅうこうけんび）の人柄を窺（うかがい）い知ることができます。

菅公が四十八才の時、讃岐守に任じられて、四国讃岐に赴任されました。菅公は皇徳の遍（あま）ねからんことを念とし、殖産興業の治績（ちせき）を挙げられました。

仁和（にんな）四年（八八八）讃岐地方が大旱魃（かんばつ）によって、田畑の作物が枯死（こし）寸前の惨状となりました。菅公は国守として、この農民の窮状（きゅうじょう）を見兼ねて

「唐土（もうこし）では昔、王が旱魃を憂い薪（たきぎ）を積み重ねて其の上に座し火を放って、自分の身に替えて農民を救い給えと祈ったところ、天神その真心に感応し、大雨を降らせて火を消し止めた」と云う故事がある。我も城山頂上にて、断食を以て雨を祈らん」と仰せられて、身を清めて登山し、城山頂上に祭壇を設け、祭服を着して祭壇に籠られました。「いまこの国は旱魃の災いで、困窮（こんきゅう）の極みにあります。自分は帝の勅を受けて此の国を治めているが、若し誤りがあれば、我を罪して農民を助け給え」と七日間断食行をして、祈りつづけられました。旱天（ひでり）の中での山頂の断食行は、想像に絶する難行苦行（なんぎょうくぎょう）であつたと想像されるのであります。

かくて満願の七日目の午後に至り、今まで雲一つもなかった、蒼天が、俄（にわか）に雨雲に覆われて、雷雨が一しきり降りつづいて、枯死（こし）寸前の農作物が生き生きと蘇生したので、農民は政庁の庭に集まって喜び踊ったと伝えられ、菅公の御徳にいいよ心服したといわれています。六年間の任期が終わって、いよいよ京都に帰られることになると、これを聞いた郷民は国衙（こくが）に参集し、大地に座って涙を流しながら、菅公との別れを惜しんだと伝えられています。

その後讃岐では、菅公の在任中の恩徳を慕って、天曆（てんりやく）二年（九四八）菅公の居られた館後に、菅公を奉祀したのが、今も神威輝く滝の宮天満宮の縁起であります。

この物語は、菅公が学徳ばかりでなく、行政にも優れたお方であったことを証すると共に、神としての霊能を具有されていたことが、窺い知られる伝承であります。

滝の宮天満宮は現在の、香川県綾歌郡綾川町滝宮一三四鎮座

菅公が讃岐守の任期を終えて京に帰ったのは、寛平二年（八九〇）の春でした。当時は藤原鎌足（かまたり）の後裔（こうえい）藤原良房（よしふさ）・基経（もとつね）が相次いで政治の要職を握り、専横の振る舞いが多かったのであります。

翌年二月阿衡問題の主人公であった基経が亡くなると宇多天皇は新しい政治体制の確立を目指して、朝廷の人事の刷新に着手、菅公も天皇の近侍として、蔵人頭（くろうどのとう）に登用され、以後、同五年には参議、式部大輔（たいふ）、つづいて左大弁（さだいべん）と目覚ましい昇進ぶりを展開してまいります。

やがて、敦仁（あつぎみ）親王（後の醍醐天皇）の立太子（りったいし）に際しては、宇多天皇は菅公ひとりに相談され、基経（もとつね）の後継者・時平をはじめとする他の参議たちの頭越しに決定すると同時に、菅公を春宮亮（とうぐうのすけ）に任命されました。

同六年（御年五十才）に菅公は遣唐使を命じられました。然るに当時は唐国も衰微（すいび）し、海路も困難の状態であつたので、菅公は唐国には最早学ぶものの無い旨を奏上し、その中止を献言され、宇多天皇もこれを容（い）れられて、遂に遣唐使派遣は廃止になったのであります。

これより十三年後には唐も滅亡したのであり、此の廃止が契機となつて、国内では漢文に替わつて仮名交じり和文の興隆を促して、いわゆる平安朝国文学の隆盛が出現したのであります。ここにも菅公の慧眼（けいがん）と偉徳（いとく）が感じられるのであります。

翌七年十月、菅公はついに従三位（じゅさんみ）中納言に任ぜられました。五十一歳の若さで、父祖も達しえなかつた中納言の位階にまで昇つたのであります。そして、九年六月には藤原時平の大納言・左大將と同時に、権大納言・右大將を拝命し、藤原氏の長と肩を並べるまでに至つたのであります。

昌泰（しょうたい）元年（御年五十四才）に、宇多上皇の御供にて大和路の紅葉の探勝（たんしょう）をかねて、奈良の手向山八幡に参拝されました。この時上皇は菅公に「幣帛の用意が無いので歌を奉れ」と宣らせられたので、菅公は直ちに

このたびはぬさもとりあえず手向山紅葉のにしき神のまにまに

と、詠み奉つたのであります。この歌は小倉百人一首の中にも選ばれて、名歌として広く知られているのであります。

このように菅公は、五才の時に和歌を詠まれてから、その御事歴（ごじれき）の中で時に応じ折りに触れて、数多くの優れた和歌を遺されております。

宇多天皇はこの年、御年三十一才で御位（みくらい）を、御年十三才の醍醐天皇に譲られ自分は上皇となつて、藤原時平を左大臣に菅公を右大臣に任じて、藤原氏の専横を牽制（けんせい）するように取り計らわれました。然しそれでも尚心許なく思われ、菅公を閑白に任ずるよう、醍醐天皇に推挙されたのであります。

藤原時平はこのことを知り心安からず思い、自分の妹である醍醐天皇の皇后を通じて、「菅公は自分の女婿（むすめむこ）とすめむこ」齊世（ときよし）親王を天皇に擁立（ようりつ）せんとの謀計（ぼうけい）あり」と讒奏（ざんそう）したのであります。天皇これを信じ給ひ勅命を下し、時平の言のまま太宰権師（だざいのごんのそつ）として、配流（はいりゅう）（はいりゅう）されることになりました。時に延喜元年一月二十五日の丑の日でありました。

心にもない罪を得て、配所に流されることになった菅公は、傷心（しょうしん）の余り庭先の梅に

こち吹かば匂いおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

とお詠みになったことは、あまりにも有名で悲しいことであります。のちに此の梅は菅公を慕つて、太宰府まで飛んで行つたと云う、飛梅の神異談（しんいだん）が伝えられています。

菅公が御屋敷をでられて、九州へ下向されるとき、常盤姫（六才）・山端姫（五才）・千代丸（四才）・皐月丸（三才）の四子と一緒に連れて行かれ、御供には老臣島田忠臣と度会白太夫（はくだゆう）の二人のみであったといわれています。

また菅公の御子達で官職に就いていた四人の御子は、夫々（それぞれ）配流された。

嫡子 右大弁（うだいべん）菅原高見朝臣 土佐權守に配流

次子 式部卿菅原景行卿 越後国に配流

三子 藏人菅原景茂（かねもち）卿 飛驒国權掾（ごんのじょう）に配流

四子 秀才（学位）菅原敦茂（あつしげ） 播州（ばんしゅう）高砂の浦に配流

この御子の内、飛驒国權掾（ごんのじょう）に配流された三子の、藏人菅原景茂卿は、国府近くの花里に蟄居（ちつきよ）されていましたが、菅公の訃報を聞くと共に父の霊を慰めんと、此の地にあった梅の木で菅公の木像を刻み、靈祠（れいし）を建てて、安置し、礼拝されましたが、その後罪を解かれて延長（えんちよう）三年（九二五）帰京されるとき、里人に靈祠の後事を委託され、里人がこの靈祠を花里天満宮と崇め祀ったのであります。これが現在高山市に鎮座されている、飛驒天満宮の縁起であります。

また土佐權守に配流された嫡子右大弁（うだいべん）菅原高見朝臣の許へ、菅公が亡くなられた後に度会白太夫から、菅公が日常佩（おび）かれていた御剣と御鏡を、形見とし

て届けられたので、朝臣はこれを靈代として菅公を祀られたのが、土佐郡潮江の里に鎮座されている潮江天満宮の縁起であります。住所 高知市天神町一九一・二〇

菅公が九州へ下向の途次、河内の道明寺に居られる、叔母君覚寿尼（かくじゅに）公にお別れのために立ち寄られ、一夜を共に過ごされました。翌朝

鳴けばこそ別れを急ぐ鳥の音の聞こえぬ里の暁もがな

と名残を惜しんで出立されたのであります。

この時菅公が覚寿尼公に託された、自画像を後に祀られたのが、大阪府藤井寺市の道明寺天満宮であります。住所 藤井寺市道明寺一・十六・四〇

この叔母君覚寿尼（かくじゅに）公は、菅公の父君是善卿の御妹で右門の方と申され、後に剃髪（ていはつ）して仏門に入られたのでありますが、菅公の十六才の時、右門の方が長患いで床に伏された貞観（じょうがん）二年の或る夜、菅公が見舞いに来て枕元に立たれ、やがてその姿が正観音の姿に変わり、光明（こうみょう）を放って消えられた夢を見られたところ、不思議にも其の翌日菅公が薬を持って見舞いに来られ、その薬の効き目で平癒されたと云う、深い因縁があったのであります。

さて叔母君と別れて、こもやま里に至ります時、藤原時平の放った刺客の危難に遭

（あ）われたとき、忽然と現れた白牛が刺客を撃退したことは既に述べたとおりであります。

その後菅公は、須磨・舞子を経て播州（ばんしゅう）明石浦にいたり、ここから船にて九州に渡らんと風待ちのため暫らく逗留（とうりゅう）され、次の和歌を遺されています。

名にしおう明石の月のかすめるはなみだのとかか春のならいか

この明石浦は、以前讃岐守に任ぜられて、ここから船で四国に渡られた想い出の所であるので、菅公もこの歌のように、漫（そぞ）ろ感傷の切なるものを覚えられたのでまりましよう。

また明石の郷民も菅公の高徳を慕っている土地柄で、明石の駅長以下は菅公を大切にもてなし、お慰め申し上げたのであります。いよいよ菅公の船出の時が来ますと、駅長は船の綱を曳きとめて、別れを惜しんだと伝えられています。菅公もその厚情に感謝されて

駅長莫驚時変改 一栄一落是春秋 （駅長驚くなかれ時の変改（へんがい）すること
を。一栄一落（いちえいいちらく）これ春秋（はるあき））

と、詩を詠んで遺されたのであります。

その後、菅公が九州で逝去されたことを聞いた駅長は、自宅庭石に腰を掛けて休まれ、詩を書かれた思い出の石の傍らに、祠を建てて菅公を祀ったのが、後に大蔵谷天満宮と崇められ、「休み天神」また「綱曳天神」と称えられました。それが現在の播州明石天神社であります。いまでも本殿左前の傍らに菅公が腰掛け休まれた石を、「菅公踞石（きよい

し」―として安置されており、境内には駅長宅跡の碑が建てられています。住所 明石市大蔵天神町二・七

菅公のお船が亀島沖にかかる頃から風向きが変わり、遂に淡路島の津志浦に着かれました。菅公はその島の中村山に登り、京都の方向を遠望し、都を追憶されたのであります。またその土地の長の手厚いお迎えを受けられ、土地の長は菅公をお慰め申し上げようと門前の小川で鮎を捕り食膳につけて差し上げましたが、菅公はその鮎を取り上げ、小川に投げ戻されると、鮎は不思議にも生き返って、泳ぎ去ったと伝えられています、そこに鮎が原天満宮が祀られています。現在 鮎原河上神社天満宮 洲本市五色町鮎原南谷五九二

その後菅公は山口の防府に立ち寄られたとき、この地の国主（こくしゅ）土師信貞（はじのぶさだ）公は菅公を客殿に招（しょう）じてお慰め申し上げ、菅公の薨（みまかり）後その地に祠を建てて菅公を祀り松崎天神と崇めたと伝えられています。現在の防府天満宮 防府市松崎町一四・一

かくて九州博多の津にお着きになったのが、延喜元年二月二十五日と云われ、このとき太宰府の大式以下諸役人が急遽浜辺にお出迎え申し上げたので、漁夫は取り敢えずお船の艫綱（ともづな）を引き寄せ丸め、円座にしつらえて、浜辺に御座席を設けて、お休みを願ったのであります。これが菅公の綱敷天神と称える縁起と云われています。綱敷天満宮 福岡市博多区網場町五・六

この時に菅公の詠まれた

流れ来て磯のもしはやつきしとて袖に玉ちるものおもいかな

のお歌には、流人（りゅうじん）として遙々九州に下向された、菅公御悲嘆（ひたん）の心境が、ひしひしと拝察されるのであります。

こうして菅公は京都を出発してから、河内の叔母君に別れを告げ、明石から海路瀬戸内海を船旅し、途中暴風の難にも逢われ、寄港（きこう）しながら苦難の旅を一カ月費やして、九州の博多の津に着かれたのであります。

さりながら菅公が九州へ下向される道すがら、沿道の寄港地では夫々その土地の要人（ようじん）の送迎を受けられたことは、菅公の御人徳を慕い、その悲運を如何にして慰め奉らんと、真心をこめてお迎え申し上げた事を物語っております。

菅公が無実の罪によって配流された太宰府は、第二十八代宣化（せんか）天皇の元年（五三四）に、北九州に設置された官府であります。

最初は朝鮮の任那（みまな）に設けられていた日本府の変遷に対処して、朝鮮との外交と国防の拠点として、周囲に掘割（水城）を構え、防人（さきもり）を駐屯させ、要害堅固（けんこ）な役所でありました。しかし平安朝初期、第五十代桓武（かんむ）天皇の御代に、防人の制度が廃止され、その重要性が失われてからは、九州地方に朝威（ちようい）を示す名目だけの、官府となったのであります。

菅公が太宰府にお着きになると大弐・小弐以下太宰府の役人は、かねてから菅公のことを知っていたので、鄭重（ていちょう）にお迎え申し上げたのであります。太宰府権師とは太宰府の長官の地位であります。菅公は左遷の身であるので府務に携わらず、榎寺を居所（きよしよ）として起居（ききよ）は専ら謹慎蟄居（きんしんちつきよ）を旨とされ一歩も外出されず、お側には御出生の時からお守役を勤めて来た白太夫と、菅家の老臣島田忠臣の外は御子四人だけで、何も知らない御子公達（きんだち）四人は、母君居まさぬ淋しさに「母君様の許へ早く帰りましょう」とねだられることが度々あつて、その都度菅公の嘆きの心は深まるばかりで、痛ましい限りであつたと云えます。

筑前の国司松根（おうね）白任（はくじん）は、もとより菅公の罪が濡れ衣であることを承知しており、いたく菅公に同情して、太宰府役人の大弐・小弐と図り、筥崎（はこざき）八幡宮への参拝をお奨めしたのであります。

菅公は此の国司の好意に感謝され、ときは延喜元年八月十五日、菅公は国司及び大弐・小弐の案内で、お附の白太夫と公達四人を連れて、太宰府から博多海岸の筥崎八幡宮まで三里の道を、徒歩で参拝されたのであります。

神前に額づかれた菅公は、案内の国司に向われて「参拝のしるしに歌を奉納したいが流人（りゅうじん）の身では如何であろうか」と控え目に尋ねられるので、国司は目礼しながら「どうぞ御心（おこころ）のままに御奉納遊ばせ」と申し上げたので、菅公は懷紙（かいし）を取り出し歌を認め、恭（うやうや）しく神前に奉納されました。

はこぎきや千代の松原石たたみくずれん世まで君はまします

このように、天皇（醍醐天皇）の御安泰を、祈念された歌を拝見した国司や大弐小弐の人々は、勅勘（ちよっかん）の身でありながらひたすら天皇に尽くされる、菅公の御心に深く感動して、いよいよ鄭重におもてなし申し上げたのであります。

かくて菅公は身の不遇を慨（うれた）かれても、常に皇恩感謝の心は忘れることなく、太宰府に着かれた年の延喜元年九月十日には、かつて清涼殿の御宴に詠じられた詩を叡感（えいかん）され、天皇から御衣（おんぞ）を拝戴（はいたい）したことを偲（おも）はれ

去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断醉腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拝余香

去年（きよねん）の今夜（こんや）清涼（せいりょう）に侍（じ）す秋思（しゅうし）の詩篇（しへん）独（ひと）り断腸（だんちよう）恩賜（おんし）の御衣（ぎょい）今（いま）此（ここ）に在（あ）り

と皇恩を拝謝されたことは、あまりにも有名であり、痛ましい限りであります。

さて此の詩を詠まれた由縁は、昨年九月、清涼殿の菊の詩会で

君は春秋に富み臣は漸く老いたり恩は涯岸なく報（むく）ゆること猶遅し

わが君は御年もまだ若くていらつしやり、自分はしだいに老境に向かっているのに、限らない君の御恩にはまだお報（むく）いしないままにいる

と詠まれた詩に、醍醐天皇の叡感（えいかん）を蒙（かがふ）って、御衣（おんころも）を拝受された皇恩を追想されたものであります。

さるほどに老臣島田忠臣は、菅公の不遇に心労を重ね遂に病を得て、延喜二年の春主人に先立ってこの世を去ったので、菅公はお悲しみのあまり

残しておく梅もあるじを忘れてや風のよすがも音たへにけり

都に残して来た梅も主人を忘れたのか、風のよすが（匂い）を送って来ないと云うのに、お前も私から去ってしまうとは悲しい事よ

と手向けの歌を詠まれたところ、その夜御庭に誰が置くともなく、飾るように一枝の梅が現れているのを、菅公はご覧になって不思議に思われ

なき人に都の梅を手向け草来て鶯も法華経となけ

都から飛んで来た梅を亡くなったお前の手向けの印にするから、鶯もこの梅に来て法華経と鳴いて弔（とむら）って呉れよ

と詠まれ、この梅を「飛梅」と名付けられました。これ菅公の悲痛な御心を、都の梅が飛んで来てお慰め申し上げた、飛梅の伝承であります。

ある日、菅公が京都に居られた頃、その御領地丹波から召使（めしつかい）として、長年お仕えしていた老人が、はるばる太宰府まで赴き、お目通りを願い出たことがあります

す。菅公はその真心を非常に喜ばれ、縁側までお出ましになり、沓脱石に蹲（うずくま）る老人と主従涙の一時を過ごされました。

さて老人はお別れにあたり「せめて何なりとも御形見の御品を頂戴致したく存じます」とお願いしたので、菅公は手箱から砂金を取り出して渡されると、老人は恨（うら）めげに

お前様これはお金では御座いませぬか、お金は使えば無くなるもの、私一代は大切に保存しても孫子の代には無くなります。又孫子も保存すれば、天下通用の宝が石瓦と同様になります。これはお返し申し上げますから、無くなることのない御形見を

と悄然（しょうぜん）とする姿に、菅公は

「これは悪かった、然らば道真の一心をこめた物を取らそうぞ」

と庭前に降り立たれ、小砂利を一掴（つか）み取り固く握り締めて

「これは私の心を籠めた物故、形見として呉れよ」

とお渡しになりました。老人「あゝ勿体（もったい）なや」と押し頂き、大切に紙に包み懐に入れ、喜び乍ら帰ったと云います。

この小砂利は丹波の国に持ち帰られて、二荷村（後世二花村）の桜石天満宮の御神体として祀られたと云われます。この桜石天満宮の境内の小砂利は、不思議にも皆梅と桜の花

形になっていると云われ、菅公の御奇瑞（きずい）として称えられています。桜天満宮
亀岡市ひえ田野町柿花中道

菅公が悲嘆（ひたん）の日々を送られている内に、次第に衰弱の様子が窺われるようになった、延喜二年暮れの大晦日に、菅公は髪を整えて元旦を迎えようと、鏡に向われたのでありますが、今までは従者に任せて髪を整えておられたので、九州に下向以来初めて鏡を見られたのであります。菅公は鏡に写った顔の頬が痩せこけて白髪となった、自分の姿の衰えに驚かれると共に、もはや赦免（しゃめん）を得ても再び京都に帰る体力の無くなつた事を悟られ、この姿を形見に残し再び鏡を見まじと、自画像を画かれたと伝えられています。

今日のみと見れば涙のますかがみ我おもかげを人にかたるな

この世の望みを諦められた菅公の悲痛な御心は、拝察するも余りある、痛ましい限りであります。この自画像は、天拝山麓の天満宮に祀られていると云われています。御自作天満宮筑紫野市武蔵六二三

菅公が太宰府に流されてより、不自由を忍ぶ謹慎の御生活が、足掛け三年目になる、延喜三年二月十八日になりました。この日都に残っていた家臣島田佐衛門・田口兵衛両名が遙々太宰府に下つて、御簾中（ごれんちゅう）の逝去とその後の都の模様をこまごまと、菅公にお話し申し上げました。

その話の中で、菅公を退けた藤原時平一味の専横はいよいよ甚だしく、朝廷を蔑（ないがし）ろにするさまをきかされた菅公は、そのまま一室に閉じ籠もられ、暫らくして部屋を出てこられると、家臣に向って

「つらつら都の模様を考えるに、このままでは天下の乱れは必定（ひつじょう）である。我鬼神となりて悪人ばらを懲らしめる為、天拝山に籠もりて祈らん」

と、御願文を認め沐浴齋戒して、太宰府の南西にある天拝山に登り、御願文を青竹に挟み捧げ持つて七日七夜断食祈願をこめられました。菅公の願文を要約すると

謹んで天神地祇に愁訴（しゅうそ）し奉る、左大臣藤原時平毒舌の讒言（ざんげん）を以て、臣が忠誠の身を流罪（るざい）せしむ、其の惡逆（あくぎやく）片時も忘れず、願わくば臣をして鳴雷（なるいかずち）の神となりて讒者（ざんしゃ）時平を懲らしめん事、臣が思い切たる処なり、道真の偽りなき誠を感応（かんのう）し給へかし頓首（とんしゅ）百拝」

と云う、皇室護持の熱意を込め、一身を賭けて佞臣（ねいしん）の懲伏（ちようふく）を祈願された、悲壮（ひそう）な願文であったと、伝えられています。

七日七夜の満願の二月二十五日の朝、菅公の身を案じた家臣の度会白太夫・島田左衛門等が天拝山に登って見ると、菅公の御頭は白髪となり、虚（むな）しく御息が絶え果てられていたのであります。

一同悲嘆（ひたん）に暮れ、なかでも家臣に加わっていた俱里加羅善武・田口達臣の二名は、菅公の御供をして御悲願をお助け申し上げんと、その場で壮絶な殉死を遂げたと伝えられています。

また一説に、満願の二十五日に一陣の風が起こり、願文が空高く舞い登り消えたので、菅公は我が願い天神地祇に届けりと、穏やかな御様子にて御居所榎寺に御帰還され、その夜眠るが如く御逝去されたとも云われています。

尚、天拝山で大祈願をされるとき、山上の岩石に足を爪先立ちになって祈られたので、岩石に爪跡が残っておると伝えられています。いま天拝山の頂上には、天拝神社が建てられ菅公を御祀りすると共に、祈願の為に立たれた岩は、「おつまたちの岩」と呼ばれ、注連縄を張り回らし「靈魂尚在天拝之峯」の碑が建てられて、神石として崇められています。

註 天拝山は筑紫野市武蔵にあつて、太宰府府庁跡南正面やや西寄り約2km離れた所にある、標高二五八mの容姿端麗な山で、古くは天判山と呼ばれていたが、菅公が祈願をされてから天拝山と云われるようになったと云われます。

また天拝山の麓に菅公自作の御像を祀った天満宮があり、この天満宮道脇に、菅公が天拝山で祈願のとき、禊をされたと云う紫藤の滝と衣掛石の遺蹟があります。

菅公が天拝山で祈願の結果、悲壮な最後を遂げられましたのが、醍醐天皇の延喜三年二月

二十五日のことであります。

太宰府の御館（みたち）に御遺骸を運んだ、家臣の度会白太夫・島田左衛門等は、菅公を安楽寺に葬りまつらんと、御棺を牛に牽かせてお送りする途中、牛が急に立ち止まり動かなくなりしました。一同不思議に思い後へ牽けば牛も戻るが、前に進もうとすると、牛は其の処まで来ると再び動かなくなるので、一行が困り果てて佇むとき、一人の老婆が出て来て

「ここは菅公が御通行の時には、必ずお立ち寄りになったお氣に入りの処で御座います」と教え申し上げたので、一同は感慨（かんがい）に堪えず、その場にお棺を葬り奉ったと伝えられています。

菅公が丑年の生まれで、ことのほか牛を愛され、牛もまた菅公の御心を察知してお仕えした不思議な因縁を、動かなくなった牛の姿を臥牛の形で表し、菅公を祀る神社に、必ず臥牛の像を安置する、信仰の縁起となっているのであります。

菅公を葬った場所は今の安楽寺の地であり、度会白太夫は墓所の傍らに仮屋を造り、七七四十九日間お仕えしましたが、その満了の日に忽然（こつぜん）と息が絶え、菅公の御後を追ったと伝えられています。

この白太夫については、既に菅公御生誕のところで述べましたが、伊勢外宮の神官で度会春彦が本名でありますが、若い頃から頭髪が白かったので白太夫と呼ばれ、学問の道に深く通じており、菅公の御生誕を神童の霊夢で知ったのが縁となり、菅公の守り役となって、一生お仕えした忠臣であります。この白太夫は今も、太宰府天満宮の末社に白太夫社として祀られております。

その後菅公の神託があつて随臣味酒安行が、延喜五年八月安楽寺の御築地（墓所）に神殿

を建て菅公を祀り、天満大自在天神と崇めたのであります。これが太宰府天満宮の縁起で、神前には菅公に縁の深い飛梅が、菅公にお仕えするかのようになつており、神園には多くの梅が植込まれて、参拝者に菅公の遺徳を偲ばせています。

菅公が天拝山で祈願の結果、悲壮な最後を遂げられましたのが、醍醐天皇の延喜三年二月二十五日のことでありました。その後延喜八年六月に至り、京都に天地を揺るがす大異変が起りました。

都の空一面に黒雲深く立ちこめて、氷交じりの大雨が降り頻（しき）り、雷鳴激しく皇居の清明殿に落雷し、火災が発生したのであります。この時居合わせた藤原時平に加担し、菅公の排斥（はいせき）に加わった公卿が、次々に焼死すると云う異変となりました。張本人の藤原時平は聖上の側を離れず、殿内を逃げ回り、ようやく難を免れることが出来ましたが、深い衝撃を受けたのか、その後脳乱し遂に翌九年に狂死して、その子孫は断絶したのであります。

その後も藤原時平一味の公卿が、次々に変死することが続いたので朝野では、これぞ菅公のお怒りならんと受け止められて、朝廷では延喜二十三年に、菅公を右大臣に復し位一階を昇せ、正二位を贈つて其の霊を慰められると共に、流罪（るざい）に処した菅公の公達（きんだち）の帰京復官を沙汰されたのであります。

こうした事件を通じて、菅公の遺徳を偲び霊を慰める風潮が都に広がると共に、第六十二代村上天皇の天曆（てんりやく）九年（九四六）三月十二日に、洛中洛外（らくちゅうらくがい）の百名程の人が、等しく菅公の霊夢を見たのであります。

「われを北野に祭れば我が望み成就す、いよいよ是れより御代を長久に守るべし、その印

に今宵の内に、右近の馬場に千年松生ずべし、明日に至り見るべし」

筑紫よりここに北野に宮居して一夜を千夜の松にこそすれ

霊夢を見た人々が、期せずして同じ場所に集まり、夢の通り松林の出現を目の当たりに見て、今更ながら菅公の威徳に感激して、力を合わせて荘厳な社殿を建造したのであります。これが京都の北野天満宮の縁起であります。第一鳥居から楼門までの参道松原は、この一夜松原の姿を留めていると伝えられています。

かくして菅公を崇める信仰は次第に高まって、第五十六代一条天皇の正暦（しよりやく）四年（九九三）には、朝廷より菅公に太政大臣正一位を贈られ、翌年「正一位北野天満大自在威徳天神」の神号を贈って勅祭二十二社に列し、篤く崇敬されたのであります。